

ブロンズ像の指針・再論

—『創立者の語らい』の箴言的解読2—

坂本 幹雄

1. ブロンズ像の指針・再論

「英知を磨くは何のため 君よそれを忘るるな」
「労苦と使命の中にのみ人生の価値は生まれる」

小論は、創価大学の『創立者の語らい』（池田 1995 - 2015）27巻を上記の創価大学のブロンズ像の2つの指針から始めて箴言的視点から解読した坂本（2016b）（以下、前回）の続編である。「原点への旅」（2:143）の続きである。『創立者の語らい』のその含蓄に富んだ数々の名言を提示していく。そのために、創立者の経験的・理論的根拠を探りつつ考察を加える。また私は経済学徒であるから、経済思想の観点からも論及する。以上のように構成するが、これらは前回と同様の枠組みである。

今回は「学光」、偉人謙虚論、教育聖業論、原点論、時間論および場所論について考察する。前回は、ブロンズ像の指針を主として「英知を磨く」、「何のため」、「労苦と使命」、および「人生の価値」に分解して考察してみた。その際、上記にかかわる論点があったが、紙幅大幅超過となってしまうため論及しえなかった。そこで小論となった次第である。まず前回は「英知を磨く」は、知識と知恵の二分法に焦点をあてた。そのため「学は光」（2:99 他）、「学問は権利」（1:5 他）等、学問・知識について単独で述べられた数多くの部分があるが、こうした点には論及できず、この特質を考察してみることがまず今回の課題である。次に「何のため」=人類の平和に貢献し、民衆に尽くした多くの偉人・著名人が全編にわたって登場するが、この点についてその1つの特徴を考察してみたい。また民衆に尽くす人材を育成する教育論も全編にわたって展開されているが、これもスケールが大きいから1つの本質的な特徴から考察してみたい。さらに「何のため」から向かった原点論は、前回あげたよりももっと多様に展開されており、やはり課題として残された。そもそも「原点」とは何かもあらためて明らかにしたい。そして「労苦と使命」の方から「人生」に焦点をあて、人生の原点論として考察してみたい。最後に「労苦と使命」について、それを実践する時間と場所について考察を加えたい。以上によってブロンズ像の指針のさらなる解読すなわち「原点への旅」を続け、『創立者の語らい』のさらなる解読すなわちブロンズ像の指針の「重層化」（2:143）を進めたい。

2. 学は光、無学は闇—光と闇のメタファー

学問論の中からは、断然、創価大学通信教育部のシンボル・「永遠の指針」(2014b:24)である「学光」に焦点をあてたい。創価大学通信教育部の補助教材の月刊機関誌『学光』のタイトルは、「ソクラテスの「学は光なり、無学は闇なり」の言葉から、請われて」創立者が「命名したものである」(池田 2005a:206)¹⁾。「学の光をもって、わが人生を、そして、社会を照らしゆく」との意から、命名された瞬間、創価大学通信教育部の「永遠の指針」(池田 2014b:24)が決まったわけである。

この「学は光なり、無学は闇なり」は、創価教育の創立者「牧口先生が愛された」ことばである(池田 1998:56, 2005b:70)。さらに拡大版があって、創価大学本部棟の前にある「高さ10メートル」の「凛々しく」立った「学光の塔」には次のように刻まれている²⁾。

「学は光、無学は闇。知は力、無知は悲劇」これ、創価教育の父・牧口常三郎先生の精神なり。この「学光」を以て永遠に世界を照らしゆくことが我が創価の誉れある使命である」

さて前述の「ソクラテスの言葉」とはおそらくプラトン『国家』の有名な「太陽の比喩」と「洞窟の比喩」の趣意だろう(坂本 2016a:6-7)。『国家』第6巻の中でソクラテスは次のようなアナロジーを語っている。

「思惟によって知られる世界において、〈善〉が〈知るもの〉と〈知られるもの〉に対してもつ関係は、見られる世界において、太陽が〈見るもの〉と〈見られるもの〉に対してもつ関係とちょうど同じなのだ。」(プラトン 1979:508C)

夜は視覚は働かず、陽光のもとで視力があることが明らかである。そしてこれに対応して魂についてのアナロジーが次のように展開される。

「それでは、同様に魂の場合についても、次のことを心に留めてくれたまえ。——魂が、〈真〉と〈有〉が照らしているものへと向けられてそこに着くときには、知が目覚めてそのものを認識し、その魂は知性をもっているとみられる。けれども、暗闇と入り混ったもの、すなわち、生成し消滅するものへと向けられるときは、魂は思わくするばかりで、さまざまの思わくを上を下へと転変させるなかで、ほんやりとしかわからず、こんどは知性をもっていないのと同じようなことになる。」(プラトン 1979:508D)

ここから「学は光、無学は闇」が読み取れる。さらに第7巻でソクラテスが「善のイデア」＝「最も光り輝くもの」と語る次のような一節がある。

「一人一人の人間がもっている真理を知るための機能と各人がそれによって学び知るところの器官とは、はじめから魂のなかに内在しているのであって、ただそれを——あたかも目を暗闇から光明へ転向させるには、身体の全体といっしょに転向させるのでなければ不可能であったように——魂の全体といっしょに生成流転する世界から一転させて、実在および実在のうち最も光り輝くものを観ることに堪えうるようになるまで導いていかなければならないのだ。そして、その最も

光り輝くものというのは、われわれの主張では、善にほかならぬ。」(プラトン 1979:518C-D)

これを次の『創立者の語らい』の一節と読み比べてみよう。

「教育の本義は、知識や情報を外から「注入」することに止まらない。知識や情報を、いかにして人々の幸福のために、人類の繁栄のために、世界の平和のために使いこなしていくのか。その主体となる、善なる智慧を、生命の内面から最大に「啓発」していくことであると、牧口会長は探究し、実践した。」(20:190)

これもその内発性という点において『国家』と見事に呼応する一節である。

「古来、「知識は力なり」また「学は光なり」といわれる」(2:99)ように、そのようなものとも思われる。たとえば、アリストテレスの「魂は、学問から(真理を知るのに必要な)光を受け取るのだ」(13:21, ディオゲネス 1989 訳(中) 26)の引用がある。またチェーホフ『曠野』の中で、神父が親元を離れて学校に行く少年を慰めて「学問は光、無学は闇、っていうじゃないか」とつぶやく(Chekhov 1991:204 訳 359)。この一節が親孝行論の中で引用されている(20:181)。その他、『創立者の語らい』の随所で「学光」のメタファーが用いられている³⁾。

なぜ多用されているのか。栄光をめざす学生への励ましは必ずとそうってくる。これではナイーブである。創立者が若き日から親しんできたゲーテ、トルストイそしてエマソン等の影響である、といった見方が自然かもしれない。もちろん光のメタファーはさまざまな分野に見られる。そもそも宗教あるいは文化全体との関連からも考えられるかもしれない。しかし今回はそのテーマ性から学問の世界に限定してまとめた。

3. 偉人は謙虚なり

「何のため」という人類の平和に貢献してきた人々の共通の特質は何か。それは1つには明らかに、その謙虚さである⁴⁾。『創立者の語らい』はこの点が経験的・理論的に明らかにされている。歴史上の偉大な人物についてもそうであるが、むしろ特徴的な点は、長年にわたり多くの著名人と会ってきた経験として、共通して言えることとして、偉大な人はみな謙虚であると随所で表明されている点である⁵⁾。たとえば次のように述べられている。

「事実、一つの道を究めた一流の人物は、必ずそうした(普遍的な—引用者補足)知恵の輝きを放っている。ゆえに謙虚であり、人格の光がある。これは国内外の多くの著名人と会ってきた私の経験からの結論でもある。」(3:8)

もう1つ同様の感懐をあげてみよう。

「わたしは、これまで世界の多くの指導者、知識人・文化人と会ってまいりました。その経験から常に思うことは、本当に立派な人、一流の人は、まことに謙虚であるということです。」(3:94)

しかしこれは経験則的なものにすぎないわけではない。仏法理論を用いた人間論の中に偉人謙虚論が含まれた講演がある。それが1994年の「人間一大いなるコス

モス」と題したモスクワ大学記念講演である。それは仏法の「妙の三義」の現代的な展開の中からは浮かび上がってくるものである。「妙の三義」について仏典には次のように規定されている。

「妙と申す事は開と云う事なり」(日蓮:1952:943)

「妙とは具の義なり具とは円満の義なり」(日蓮:1952:944)

「妙とは蘇生の義なり蘇生と申すはよみがへる義なり」(日蓮:1952:947)

この「開く」、「具足」、「蘇生」の「妙の三義」が「規範性」、「普遍性」、「内発性」に「敷衍」される(記2:197-198)。

まず「開く」とは「依って生きるところの根本規範を、人間自身の内面から開いていく」という「規範の開示」の意味である。いいかえれば「如意宝珠」＝「仏性」の開示という意味である。この「根本規範に目覚めた人間ほど、強いものはない」。この例としてトルストイ文学があげられる。『アンナ・カレーニナ』におけるレーヴィンと一農夫との「魂と魂の触発」による開示がそれである。暗から明へ、闇から光への回心のドラマの「生のダイナミズム」のトルストイの世界は、法華経の「躍動感あふれる生命感」と「強く共鳴しあって」おり「生命の本然的な凱歌」にはかならない(記2:199-201)。

この開示された規範は、「具足・円満」の部分観・差別観ではなく全体観・包括的世界観でなければならない。すなわち「具足・円満」の義は、「普遍性」(「共生」「縁起」の秩序感覚、コスモス感覚)の拡大、「小我」から「大我」への自我の拡大と規定される。レーヴィンの「青い円天井」(Tolstoy 2012:783 訳(下)468)という感性による「普遍性」の「感触」もまたあたたかな「人間性」の「宇宙生命の鼓動そのもの」の世界である(記2:201-205)。

「蘇生」とは「物事を固定化せず、「今日より明日へ」と蘇りゆく創造的^め生命のダイナミズムを保ち続けること」である。仏法では「自身法性の大地を生死死と転ぐりゆくなり」(日蓮 1952:724)と「永遠の生命を貫く本源的な蘇生の力が、人間自身に内在すること」が明示されている。「蘇生」とは「内発性」の「異名」である。すなわちドグマを脱却した「レーヴィンの懐疑」は「内面を見つめ直し、日々新たな自分を作り上げていこうとする内発的な力」である。そのような内発的な力は「古来、人格的な価値の枢軸を成す「謙虚さ」、そして「寛容さ」を生み出す母胎」であった(記2:205-207)。

そして規範性には「依って立つ足場に対する確信」が伴うが、重要なのは「レーヴィンの懐疑」という「内発的な力」である。「レーヴィンのように、その「規範」の正しさを常に問いかける内省の眼があつてこそ、「規範」は化石化せず、生き生きと創造の営みを続けられる。「逆にいえば、謙虚さや寛容といった内発的な人格的価値に結実しない「規範性」は、どこか虚偽やごまかしがある。「規範性」と「内発性」が「両々相まってこそ、すぐれて人格的な力」となる。「ゆえに強い人ほど謙虚であり、確信の人ほど寛容」である(記2:207-8)。

以上が規範性・普遍性・内発性という妙の三義の現代的解釈の大略である。トルストイ文学の1つの解釈にもなっている。この展開の中に謙虚の徳性という人格的

価値が立ち現れてきた。かくして「人間一大いなるコスモス」の「人格形成」は謙虚の徳性に表出され、本講演は偉人謙虚論の理論的解明にもなっている。

このような人類の平和に貢献しゆく謙虚にして寛容の資質を具備した人材が待望されるが、その人材を育てる事業こそ教育である。いよいよ教育そのものについて焦点をあてて進めたい。教育の本質として強調されているこれもまたやはり伝統的な「教育は聖業なり」という名言に進もう。

4. 教育は聖業なり

『創立者の語らい』後半の基調となっているものは、教員革命論と親孝行論である。そのスケールの大きな教育論に関して論ずるためには一書を要するだろう。小論では繰り返し強調されている教育の本質を一言で表した現代では失われた感のある伝統的な「教育は聖業なり」ということばに焦点をあててみたい。

『創立者の語らい』では「教育は聖業なり」と繰り返し強調されている⁶⁾。まずその意味について問えば、答えとしては、創価教育の原点をあげるのがベストだろう。創価教育の創始者・牧口常三郎『創価教育学体系』の「教育方法論」の「緒論」に次の一節がある。

「教育は最優最良の人材にあらざれば成功することの出来ぬ人生最高至難の技術であり芸術である。是は世上の何物にも代え難き生命といふ無上宝珠を対象とするに基づく。」(牧口 1983:253)

この一節から次のように「教育は聖業なり」と解釈される。

「人間の生命は、「宝の珠」のように尊い。その生命を対象とするのが教育である。ゆえに教育こそ最高の「聖業」であり、教育者こそ最高の「使命ある人」である。」(11:57)⁷⁾

それでは教師はこの聖業たる教育にどのような姿勢で携われればよいのか。この点もまた実に明確である。すなわち『創立者の語らい』では学生をわが子以上に大切にし、愛していくことであると繰り返し強調されている⁸⁾。また創立者の2000年の教育提言(池田 2014a)では「社会のための教育」から「教育のための社会」へのパラダイムの転換が提言されている⁹⁾。

前者は、想像を絶するファカルティー・デイベロップメントである。後者は教育のコペルニクス的転換である。なぜそうなのか。私は経済学徒であるから、経済学の方から考えてみたい。

経済学では、教育は次のように把握されている。教育は投資である(人的資本論)。教育投資は経済成長・技術進歩・社会の発展に寄与する。教育は消費である(消費者主権論)。教育はサービス業である(教育市場論)。教育は外部性である(市場の失敗)。教育は(準)公共財である。あるいは学歴はシグナルである(労働市場の情報の非対称性の解消)等。

そもそもアダム・スミスは教育経済学の創始者でもあったといえる(坂本 2011)。スミスには人的資本論・職業論・高等教育サービス市場論等もあるからである。た

だしスミスは道徳哲学者でもあった。ちなみにスミス自身は学生最優先の教師像を体現していた(坂本 2011:42)。

現代経済学は、この道徳哲学とは遠く離れてしまった。確かに現代経済学は、新古典派経済学の合理的選択理論の経済人という人間像を超えて、利他性を導入した効用関数を設定したり、認知科学や心理学の成果を摂取した行動経済学などにより人間の多様性を見つめるようにはなってきた。また応用経済学の一分野として教育経済学があるが、学歴と所得の関係、学力の向上といった伝統的なテーマだけではなく、非認知能力の向上の要因等の分析も進んでいる。そうした実証研究により、すぐれた成果や知見がもたらされている。しかし道徳哲学としての経済学という視点は少ないだろう。少なくとも主流ではない。たとえば、政治哲学者マイケル・サンデル(Sandel:2012,2013)は、経済学に乗り込んできて、市場経済による道徳の破壊を強調している。経済学はそれに応答しなければならない。経済学者は経済学の限界を知って研究しているというだろうが、サンデルをたやすく打ち返せるように経済学はもっと思想的に深く豊かな基盤の上に改善されるべきであると思う。

道徳哲学が希薄なままに極度に専門化した現代経済学による教育の把握は、『創立者の語らい』の世界から見るとまことに心もとない。簡単な経済学の思考法をあげよう。たとえば経済学はコスト・パフォーマンスや費用対効果を重視する。供給の学校側は授業料という対価に見合う教育サービスを需要の学生・親の側に提供しなければならない。授業が最適化されていけばよい。教師に与太話など余談を許さない等の点では啓発的である。しかしこのような教育市場・教育サービス業の視点からは、(実際にはさすがに教育＝サービス業に尽きるとする教師は少ないだろうが)当然であるが教師が「学生を「わが子以上」に大切にし、面倒を見て」(22:9)いくことにはなりえない。「一度面倒を見た学生は、自分が死ぬまで面倒を見ていく」(8:40)、「生涯にわたって、学生を大切にすること」(16:138)もありえない。そして教育投資には、教育費を負担する親のためという側面が大きい。学校側は親に対して一定の便益の説明責任がある。ちなみに効用関数は親のそれであって、学生や教師のそれは難しすぎる。そして外部性・公共財は社会のためである。直接に子どものためというわけではないだろう。

前述の「教育は芸術である」に象徴されるように、そして『創立者の語らい』の教育世界全体が示すように、教育は、生徒や学生の人格形成を含んでおり、プライスレスの側面があまりにも大きい。相応の報酬に値するプロの講義・授業だけでは足りない。人格形成は前回述べた「桜梅桃李」の個性や個別的側面が強く一般化・法則化できるものではない。英知の総力を結集しなければ、教育全体の変革にはいたらない。

教育の成功は、まず「教員革命」(16:142,7:6 他)から始まる。教師の学識だけでは足りず、教師自身の「人格」が決め手である。「教育は地味ではあるが、人間をつくり、育てる聖業である。これほど尊い仕事はない。これほど価値ある、喜びの深い仕事はない」(17:7-8)と説かれている。教育の長期的効果・結果を考えるとむ

ずかしいが、生徒や学生の成長を喜びとする教師の効用関数を経済学徒としてあれこれと妄想してみる。ディープなものは測定不可能だろう。「教育とは魂に光を点すこと」(特 217)だからである。

『黒の女教師』(2012)という連続テレビドラマがあった。「チャイムトゥチャイム」をモットーとする主人公の教師が、生徒の抱える切羽詰まった深刻な問題を「課外授業」と称して高額な報酬を受け取り解決する。学園版必殺仕事人であった。「チャイムトゥチャイム」のベストはよいとして、教育聖業論では、この「課外授業」はおそらく身銭を切ってあたるべきものである。「牧口先生は北海道では、あかぎれの子がいれば、お湯で洗ってやり、吹雪の日には幼い生徒を背負って、家まで送った」(特 215)。「極貧の地域で」「弁当も持ってこられない子のために、先生は給料をさいて、豆もちや食事を用意した。しかも、気がねなく持っていけるように用務員室に置いた」(特 215)。「何でもやろう。この子たちを、ひとり残らず幸せにするために、教師がいるのだ」(特 215)。

しかしそうしていたら教師個人はやがてその負担で行き詰るだろう。そこに経済学をはじめとする社会科学の出番もある。経済学はもちろん生徒の抱える深刻な問題に即座に対応はできないが長期的に制度的・政策的側面からアプローチする。その際、たとえば教育経済学ともなれば「何のため」を常に問い続ける確固たる経済哲学と教育哲学を明示した仮説の設定から始めた結果考察・政策提案を期待したい。教育事業も教育を研究対象とする諸学も、まずは発想の原点を「わが子以上に大切」と「教育のための社会」に求めてリセット・再スタートすべきである。『創立者の語らい』の「人間への慈愛」という「魂の光」(特 216)の教育聖業論はそう語りかけているかのようである。

5. 原点論

『創立者の語らい』は全編を通して、原点の大切さが強調されている。原点＝生命・人間・青春・故郷・母校・師匠・創立者の精神・建学の精神等、さらに教育・学問・政治等の原点と、さまざまな原点が時にクロスしながら多面的に語られている¹⁰⁾。今回は「何のため」の原点論について考察を加えた。上記の原点についても間接的に言及した。『創立者の語らい』は「原点を忘れるなかれ」、「自己の原点を深め続けよ」(2:143)との規範的言明にあふれている。しかしまずそもそも「原点とは何か」。この点も『創立者の語らい』では明らかにされている。今回はまずメタ原点論について確認してみたい。次に「労苦と使命」の方から「原点」を考えてみたい。「労苦と使命」の道を歩みゆくのが正しい人生であるから、「原点論としての人生論」として焦点をあてて見ていくことにしたい。

原点とは何か

まず一流の人物には必ず原点がある。この点が次のように述べられている。

「芸術家であれ、思想家であれ、経綸の人であれ、多くの一流の人物というもの

はその人生を決定づけたそれぞれの不動の原点、光源を、生涯、胸中に抱いております。彼らの一生は、ある意味で、その原点を確認し、行動の中で実証していった「原点への旅」であったといっても過言ではない。その「一をもって貫く」¹¹⁾ 信念の翼が彼らを人間としての偉大の高みに運んだのであります。(2:143) 裏返せば、原点がないと一流にはなれないということである。前述のように「偉人は謙虚なり」について考察したが、「偉人に原点あり」がその特質として加わる。

しからは、一方そもそも原点とは何なのか。これまでから具体的には明らかであるが、上記の原点論ではゲーテのケースがあげられている。ゲーテの原点は『ファウスト』に「着手」したことである。『『ファウスト』は、私の『ヴェルテル』と一緒に生まれた」(2:143, Eckermann1999:304 訳(中) 59)¹²⁾。その「詩人をして生と死の深淵を除きこませた青春の灼熱の激情」(2:143)である。この原点・「原体験」が「やがて世界文学の至宝として結実する」。ゲーテは、82歳の生涯の約60年間にわたって、『ファウスト』を「書き継ぎ、重層化」した。「そこには個人と宇宙との連関性を主軸にした「生」へのあらゆる多様な局面が網羅」されている。ゲーテは「この壮大なドラマの中に、己の一切を投入」した。この畢生の大著を完成させたゲーテの生涯から、原点が次のように規定されている。

「原点とは、人生行路を照らす導きの星であり、豊かな創造と前進のバネである。また大樹をはらんだ種子ともいってよい。そして正義の信念を燃やす核であり、自己を静かに客観視するための座標軸を与えてくれるものなのであります。」(2:144)

上記に「一をもって貫く」と『論語』の一節があるが、この「一」については別の考察があるから、次にそれをみることにしよう。

仏法哲学の原点論

原点とは何かについて仏法哲学のメタレベルからの考察がある。原点がいかに深い意味を持つものなのか、仏法哲学の観点から次のように明確に解き明かされている。

「仏法の本義からすれば、一大事の“一”とは現代風にいえば“原点”ということなのであります。人間が生きていく上での根本の指針である哲学の存在を意味している。一大事の“大”とは、原点より発して社会、自然、宇宙へと展開しゆく生命の拡大、知恵の発現をいうのであります。そして一大事の“事”とは、生命の拡大、知恵の発現といっても、観念の世界にとどまるものではなく、事実の上に刻まれるということから“事”というのであります。したがって一大事の“大”や“事”はわれわれの精神面、物質面の転変し続ける活動の側面であるともいえるわけであります。その活動を支える主体が一大事の“一”である。すなわち、それが“原点”となるのであります。……学問であれ、思想、哲学であれ、必ず、何らかの“原点”から出発しているのであります。そしてそこには、角度こそ異なれ、人間への思いが込められているものなのであります。」(1:175-176)¹³⁾ このように原点には仏法の「一大事」の「一」の深い意味がある。

人生の十字路—人生の原点

原点の意味も把握できたところで、原点論としての人生論に進もう。母校に集った卒業生に対して次のように語られている。

「人生の十字路に常に立たされているのが人間である。」(2:118)

衝撃のスピーチとはこれである。失敗を恐れるな、負けるなど励まし、次のような鮮烈な一節が続く。

「人生の「十字路」に立つとき、右へ行く道は墮落と享樂と敗北へと向かうものかもしれない。また左の道が素晴らしい道のように見えることもある。だがそれが“麻薬”のような快感を与えてくれながら、そこには不幸の落とし穴が隠されているかもしれないのであります。／というように、人生の将来はなかなか見通せない。人の行く末はだれにもわからないものである。」(2:118)

このような「人生の「十字路」に立って悩み、迷ったとき」どう対処すればよいのか。「迷わない」、「負けない」ためにはどうすればよいか。もちろん創価思想の原点「牧口先生の至言」である「行き詰ったら原点に返れ」(特 213,12:127)。

「人生の「原点」を持った人は強い」、「「原点」をもたない人は、人生の十字路に立つとき弱く、はかないものだ」(2:119)からである¹⁴⁾。ちなみに経済学徒としては、双曲割引＝現在バイアスに対処してコミットメントを、と十字路に立って、行動経済学の自減選択理論を用いて考えることもできる¹⁵⁾。縁する学生にも自分にも明確な決意表明を促している次第である。しかし結局、それは自分との戦いに帰着する。乾坤一擲の人生の十字路に立つ時があるはずだ。その時、原点があるかないか、原点に戻れるかどうかが勝敗の因となる。

このスピーチの指す原点は母校である。母校という原点に戻ることである。母校の「創友魂」を「原点」として進むよう母校に集った卒業生に期待されている。そこで次に母校に焦点をあてることにしよう。

母校と故郷

母校原点論の意味をもう少し確認していこう。母校は「故郷」(5:35)、なかならず「魂の故郷」(10:44)であると説かれている¹⁶⁾。「ふるさと」が「懐かしく、大切なのは、そこにいつも何か変わらないものがあるから」であり、「どんなに時代や社会や皆さんの境遇が変わっても、自分の変わらぬアイデンティティー」、「根っこ」を確認することができるからである(2:190)。

「心に故郷が生きている人は幸せである」として、ヘルダーリンの詩が次のように引用されている。

「——故郷を持たぬ人は、土地に根を持たない草木のようだ。／——そして願わくは心が故郷を失って、あらぬ方へと、さまよい行くことのないようにと」(3:167)¹⁷⁾

また合わせて「帰郷」とは「根源に近きところ」に帰りゆくことだと論じたハイデッガーのヘルダーリン論が紹介されている¹⁸⁾。そしてこの母校＝原点たる故郷へ

戻ること、すなわち「帰郷」の意義とは「自己の生命の根源に限りなく近づいていくこと」であり、「その根源に帰ることによって、人は安らぎを得、清新な、はつらつたる生命力を取り戻していく」(3:167)と説かれている。

故郷については、さらに究極的な故郷論がある。「日本中、世界中に私の“故郷”がある」として次のように明かされている。

「“故郷”とは、自分の生まれた場所だけではない。自らが努力の汗を流して、わが存在、わが行動の足跡を刻んだ所こそ、自身の“魂の故郷”だからだ。……わが使命の命をたたきつけ、おのれという存在を、その山河に刻みゆくとき、そこが、……第二、第三の故郷となる。」(3:197-198)¹⁹⁾

このように述べて、各自の魂の故郷の拡大を人材論の要諦としている。それでは次に「ここが、自分の第二の故郷」(3:197)といえる場所について考えてみることにしたい。

6. 今いるその場所から一時間論・場所論・自分論

労苦と使命はいつどこで果たされていくのか。今、その場をおいてほかにない。『創立者の語らい』はこの「今そこにいる自分」という時間論・場所論・自分論が全編にわたって展開されている。

今を生きる — 現当二世

まず時間を軸にあげてみよう。『古文新宝』(星川 1956:4)「勿謂今日不学而将来日」(謂うこと勿れ、今日学ばずして来日ありと)より、「明日ではない、今日こそ学べ」(3:62)²⁰⁾。アインシュタインいわく、「私の永遠は、今、この瞬間なんだ。興味があるのはただ一つ、今自分がいる場所で目的を遂げること」(12:122-123, Hermanns1983:The Third Conversation 訳 172)。この心は「今、この瞬間を勝て。自分がいる場所で勝て」(12:123)ということである。周恩来を通して「今が大事、今を勝つ」(16:28)。そしてマリー・キュリーを通して「いたずらに時を空費し、無駄に過ごすことがあってはならない。一日一日が重要だ。一年一年が貴重だ」(15:79)。「一度きりしかない、この人生。一日一日、一瞬一瞬が、どれほど貴重か。まずは、目前の課題に全力で取り組むことである」(16:51-52)等と随所で強調されている²¹⁾。

ゲオルグ・ジンメル『断章』に次のような一節がある。

「あたかも各瞬間が究極の目的であるかの如く——それと同時にいかなる瞬間も究極の目的ではなく、それぞれさらに高きもの、あるいは最も高きものへの手段に過ぎぬかの如く、人生に処さねばならぬ」(2:101, Simmel 1967:18 訳 38)

この一節が新入生へのはなむけのことばとして贈られている。今日は目的にして明日への手段である。今日一日を大切にせずして、より充実の明日はなし。ゆえに今日という日は、それ自体、1つの究極の目的である。それと同時に今日の自分は明日の自分であってはならず、より高き理想への階段を上り続ける過程であり手段となる(2:101-102)。「諸君は午前八時の太陽²²⁾であります。太陽は、いついかなる

時でも、厳として変わらざる光彩を放っております」と規定し、「日々新たにして、日に日に新たなり」²³⁾との「気概」を持って「汝自身の進歩と向上の戦い」をと期待されている(2:102)。

創立者が「青年時代に親しんだ」エマソンを通して「目下の課題に生きよ」(2:125-126)と卒業生に期待されている一節をあげよう。エマソンの「自己信頼」の「バラの花」の話(Emerson:1982:189 訳 59-60)の趣意が次のように紹介されている。

「この窓の下に咲いているバラの花は、昔のバラや自分たちより優れているバラを参考にしない。／彼らは、自分の本領を發揮しさえすればよいのだ。バラは葉の芽が吹き出る前でも全生命で躍動している。花の満開の時だけでなく、葉の落ちてしまったあとの根においてもそうである。／バラの本性は、あらゆる瞬間に、同じように満足し、またそれは、自然を満足させているのである。／ところが人間は追憶したり、過去を嘆いたりして現在に生きようとしめない。そして今自分を取り巻く財宝には気がつかないで未来を予見しようと爪先で立っている。／人間も大自然とともに時を超越して、現在に生きるようにならなければ幸福で強い存在にはなれない。」(2:126)

現代の「管理社会」のその欠陥と息苦しさの中にあって、あたえられた課題から逃げているような姿勢では、「最終的には、生きることそれ自体までも放棄」するような「人生の敗者」である、と厳しく戒められている。「現実にある目下の課題に、今日も自分自身の力で、生き生きと生き抜いていく」ことを念願されている。「その汝自身の心のあり方によって」エマソンのいうすべてを「自分を取り巻く財宝」としていけると確信されている(2:126-127)。

古典を中心に取りあげてきたが、次に海外の識者と会われた経験を中心にあげていこう。冷戦時代に米ソの懸け橋として首脳会談への道を切り開いたアーマンド・ハマーの信条と行動を紹介したスピーチの中で一日の重みが次のように強調されている。

「きょう一日、自分は何を成し遂げるか。この人生で、何を愛する「地球」に残しゆくか——。博士は、こうした信条のもと、一日一日の行動に、一回一回の出会いに、文字通り、真剣勝負で取り組んでおられる。そこには、いささかの手抜きもない。無駄な時間も使わない。」(3:172)

しかも「電光石火」にして「的確」な行動である。合せて89歳(当時)のライナス・ポーリングが会見後に「翌日、朝一番から仕事を始めたい」と一泊せずに日帰りだったエピソードも紹介されている。ハマーとポーリングの二人の年齢を超えた行動は「青春の魂」の証と称される。まとめとして「きょうできる仕事をやり遂げ、明日訪れるチャンスを待つ。昨日に割く時間はない」との発言と仏法の「現当二世」²⁴⁾の観点から「何があっても、ふてぶてしいまでのたくましきで、現在から未来へ、きょうから明日へと、突き進んでいただきたい」と述べられている(3:174-175)。

さらにこの「現当二世」については、次のようにも説かれている。信念を掲げて戦い続けることを表明されるパトリシア・エイルウィン・チリ元大統領を創価大学に迎えて、次のように述べている。

「仏法でも「現当二世」と説いている。現在から未来へ、きょうから明日へ——。後ろを振り向かず、ただ前を見つめて進んでいく。この爽快な青春の心で生きれ

ば、太陽はいつも清々しく輝く。」(4:214)
前述の「午前八時の太陽」に呼応する。

またベルリン五輪のスーパー・ランナー、ジェシー・オーエンスの努力を紹介しつつ、「現当二世」とは「過去の失敗に、とられるのも愚か。過去の小さな業績におごるのも愚かである。……過去ではない。今から未来へと勝ちゆく挑戦」を教えているものであり、「この心を忘れた人生は、狂った軌道に入っていく」(5:54)と厳しく説かれている²⁵⁾。

さらに仏典からの引用には次の一節もある。

「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」(記3:40, 日蓮 1952:231)

これは次のように解釈されている。ひとまずここでの結論としよう。

「いたずらに過去にこだわらず、また未来への不安や過度の期待に引きずられることなく。“今、現在”の自己の充実と確立こそ第一義であることを啓発している。」(記3:40)

いわば「刹那に永劫を生きよ」「足下を掘れ、そこに泉あり」と「凝結した生き方の提示」となっている(記3:40)。いよいよ「足下を掘れ、そこに泉あり」となったところで、場所論へと進もう。

場所論

「足下を掘れ、そこに泉あり」²⁶⁾はニーチェの言葉が有名である。前述のハイデッガーの帰郷論・根源論もあった。さらに夏目漱石論にも類似の考察がある。「自分自身を生き切れ」との卒業生への「はなむけの言葉」の中で、漱石の「私の個人主義」の有名な「他人本位」と「自己本位」の生き方論が紹介されている(2:192-194, 夏目 1978:132-139)。漱石の「ああ、ここにおれの進むべき道があった! ようやく掘り当てた!」(2:194, 夏目 1978:139)の一節に「同感」しつつ、次のように述べられている。

「君でなければ掘り当てることのできない、君自身の輝く黄金の鉱脈は、ほかならぬ君の足下に眠っている。その鉱脈を掘り当てるまで、苦勞し、邁進しぬいていただきたい。」(2:194)

漱石の場合、具体的な場所を示すわけではないが、もちろん自分が親しんできた文学という分野から外れたわけではない。実際に具体的な場所から考えてみよう。

問題は自分のいる場所が自分と合わない、自分の意に沿わない点である。就職した卒業生の多く、世界中の青年たちが直面する問題である。その時どうするか。逃げてはいけないと随所で励まされている²⁷⁾。たとえば「まずは十年、愚痴をこぼさず、決して諦めず、自分の場所に根を張っていただきたい。そこに、燦然と勝利の峰が輝くことを確信していただきたいのであります」(4:145)。さらに「……まず、会社に入ったならば、“あの創大生は立派だな”と信頼され、職場の軸として期待されるような一人ひとりになっていくことだ。／そして、何でもいい、「自分は、これをやり切った」と自信をもって言える何かを後世に残していくことだ。そういう人生を生き切りたい」(12:127)。さらに「社会は、思うようにい

かない苦闘の連続です。希望通りの進路にならなかった場合もある。しかし、そうしたことで大切な自分を見失ってはならない」(19:218)。

具体的な例として、何人かの人物をあげていこう²⁸⁾。

エミール・ゾラは青年期に進学を断念して出版社に勤め、執筆ではなく発送・梱包の仕事だったが前向きに取り組んだ²⁹⁾。この姿を通して次のように主張されている。

「いかなる立場に置かれても、そこで最大限に力を発揮し、新たな世界を切り開いていく。一切を、自らの決めた道を進みゆくための発条として、労苦の中に未来の成長を求める。」(3:44)

ライナス・ポーリングの新発見の秘訣の1つ、「1つの分野の考えを他の分野に生かしていくこと」をあげて、次のように卒業生を激励されている。

「諸君が社会に出て、一見、自分には不向きで肌が合わないと思う分野で仕事をせねばならぬ場合もあるかもしれない。また当然あると思う。／しかし、そうした時にも決して逃げることなく、忍耐強く創意工夫を積み重ねていくかぎり、おのずから人生の深き知恵の光が輝きを増してくるものであります。」(3:96-67)

さらに創立者自身の20代の営業・編集・外交・秘書等、あらゆることをやり切った経験が語られ、「それが今、ことごとく生きております」(3:97)と明かされている。また犬丸哲三帝国ホテル社長の大学卒業後に下働きから修業を積んでいった生き方(犬丸 1980:387-440 参照)を通して、職場に関して次のように述べられている。

「諸君も、初めから、思い通りの職場にいけるとは限らない。しかし、どこであれ、「そこで光る」ことである。どんな小さな仕事でも、ぴかぴかに輝くくらいに、立派に仕上げることである。その人に「信用」ができる。その人が一流になる。一流と言われる会社にいる人が、一流なのではない。「一流の人間」が働いている会社こそ、どこであれ、何であれ、一流なのである。」(5:139)

そして「その場で光れ!」「その場で自分を鍛えよ!」「自分を壮大な城のごとき人間に築き上げ」(5:140)るよう卒業生に期待されている。

さらにまたネルソン・マンデラとの語らいから、その闘争を紹介しつつ、「人生の行路にあっては、思うにまかせぬ境遇に立たされる時が幾たびもあります。／その時が勝負です。嘆かず、腐らず、焦らず、「じっとこらえて今に見ろ」と不屈の旗を振りとおしていくことです」(23:100)と激励されている。そして「東北出身の哲人」阿部次郎が大切にしてきた人生哲学、辛抱強く「自分の持ち場を本気に守り通す」³⁰⁾、「自分の置かれた場所に於いて最善を尽す」³¹⁾を紹介され、「ともあれいずこへ行っても、いずこにあらうとも、そこで自らの使命を見出し、そこで新たな価値を創造し、勝ち栄えさせ、発展させてみる」「心意気」を説いている(23:100)。

ともかく「どこであれ、自分のいる場所、自分の部署で、「かけがえのない人」³²⁾になって」いけば、その結果として、「わが道に徹し、なくてはならない人物へと自己を練り上げていった人は、やはり人格の上でも、社会人としての力量の上でも、使命の人生の完成の上でも、一つの完成をみている」(3:119)と洞察されている。まさに「一隅を照らしゆく」³³⁾人材の成長が期待されている(3:92)。

「かけがえのない人」については、これもよく引用されているが「牧口先生の有名な言葉」に「三種類の人間がいる。いてほしい人、いてもいなくてもいい人、い

ては困る人」(5:135-136)とある。あるいは「いてもいなくてもいい人」「いてもらいたくない人」「絶対に、いてもらいたい人」(16:7-8)ともある。当然、「絶対に、いてもらいたい人」になってください」(16:7-8)と期待されている。

最後は『創立者の語らい』らしく詩人の一詩でまとめとしよう。

「悠然と／その地で 君よ／勝ちゆけや／深き使命の／魂 忘れず」(11:61)

道場

最後に仏法の場所論をみよう。道場である。創価大学の側の「善太郎坂」の由来となった小島善太郎画伯は、少年時代から労苦に次ぐ労苦を重ね、なお「亡くなる寸前まで、毎日8時間の仕事を日課とし、間断なき創造の歩みを貫かれた」(6:19)³⁴。画伯の青春時代を綴った自伝の次の一節が紹介されている。

「現実を回避してはならない……／労苦の蔭に真珠が蒔いてある……画の修業もそれではあるまいか。好きなものだけに眼を向ける……それだけでは画の修業も成り立たない／……研究所に通おう。そこで再び悩みぬこう！ そこそ自分をつくってくれる道場でなくてはならない。」(6:17-18, 小島 1971:333)³⁵

そして「自分自身の戦いの場所」としてこの「道場」を強調されて次のように述べられている。

「人生には自分を、鍛える「道場」が必要である。「道場」がなければ、師範にはなれない。一流にはなれない。名人にはなれない。」(6:18)³⁶

この道場が仏法の「当詣道場」につながっている。「此を去って彼に行くには非ざるなり」(6:18, 日蓮 1952:781)との「御義口伝」の一節が引用され次のように説かれている。

「今いるところを離れて、どこかほかに「道場」があるのではない。わが一念を固めた時、職場も、地域も、すべてが最高に意義ある「道場」となる。勝ち戦のための「道場」となる。」(6:18)

これをもってひとまずここでの結論としよう。

7. まとめ—「原点への旅」は続くよどこまでも

以上、今回は、「学光」のメタファー、偉人謙虚論、教育聖業論、故郷論、人生原点論、「今そこにいる自分」=時間論・場所論・自分論に整理してきた。今回も『創立者の語らい』を、ブロンズ像の指針という原点の「重層化」として解説してきた。『創立者の語らい』という励ましの書は、仏法哲学、創価思想の伝統、創立者の若き日から今日にいたるまでの博学な読書経験=文学を中心とする人類の知的遺産の活用、そして世界の識者との対話等によって屹立している。前回にも増して『創立者の語らい』世界がより多面的・立体的に把握できたのではないかと思う。

前回と今回を合せて、ブロンズ像の指針をもとに、『創立者の語らい』を読み進め、その世界の全面展開・開示に向かって歩みを進めることができたのではないかと思う。また翻ってブロンズ像の指針には、『創立者の語らい』の思想が凝縮されていることも読み取れたのではないかと思う。

一方、小論の残された課題も明らかとなっている。「原点への旅」はまだまだ続く。親孝行論・正義論・読書論・およびいわゆる勝負哲学等について触れてはいるのだがその方向へ向かうことは留保している³⁷⁾。これらの課題にも順次、取り組んで、ブロンズ像の指針と『創立者の語らい』のよりいっそうの理解に資することにした。

注

- * 『創立者の語らい』からの引用は巻数と頁を 1:1、『記念講演篇』は記 1:1 のように記す。『特別文化講座・随筆・長編詩篇』は、奥付に「特別版」とあり、特 1 のように頁を記す。なお 2 つの特別文化講座は、第 12 巻と第 15 巻に重複収録されている。この引用頁は通巻の方を記す。『池田大作全集』は『全集』と略記し、巻数と頁数を 1:1 のように記す。
 - * 前回同様、『創立者の語らい』の中で引用されている諸文献に関して、小論では、入手困難等の事情により異版を利用している場合がある。
- 1) この機関誌のタイトル決定の詳しい経緯については、池田(20014b:23-4)参照。
 - 2) 「塔を飾る躍動感にあふれた男女六体の若者の像」は、「挑戦」「情熱」「歓喜」「英知」「行動」「青春」の 6 つのテーマを表現したものである(池田 20014b : 82-83)。アプエバ・池田(2015:317-318)にも言及がある。
 - 3) 用例を完全ではないが網羅的にあげてみよう。「学は光なり」(1:16)。「学問は光」「無学は闇」(2:11-12)。「学」は「光」であり、「学」は「力」また「希望」である(2:161)。「学問の光」(5:32)。「学問の光」を「輝かせなければ、時代の闇は晴らせない」、「学問」とは「真理の光明の探求」である(6:64)。詩人フレデリック・ミストラル「一人の「学の光」」(8:25)。「学は光」を合言葉に集い合われた、多彩な分野の皆さま方(8:26)。「時代の闇」「教育の光」(13:21)。「学問は、暗黒を照らす真実の太陽である」(14:36)。「学は光」、異文化との対話(14:100)。「教育の光」「知性の光」(15:67)。「学は光」「学は指導者」「学は平和の道」(19:131)。「学は英知の輝き」(20:161)。「価値創造の太陽」= 青年(23:19)。「不屈の信念の光を」(23:17)。「創新の英知の光を」(23:19)。「調和の人格の光を」(23:20)。この 3 つの光をまとめて「不屈の光」「創新の光」「調和の光」(23:21)。わが「学光の友」の誉れの大先輩 = ネルソン・マンデラ(通信教育で大学を卒業)(23:98)。「知は力なり」「学は光なり」(23:182)等。ちなみに「学は光」はサドーヴニチィ・池田(2004)のタイトルにもなっている。なお意味が異なるが、後述の「午前八時の太陽」も参照。
 - 4) 関連する日本のことわざとして「実るほど頭を垂れる稲穂かな」をあげることができる。偉人謙虚説に関する古典の諸文献の検討は今後の課題としたい。
 - 5) 歴史上の人物も含めて少し具体的な人物をあげておくと以下の通りである。ローマクラブの創設者アウレリオ・ベッチェイ(2:10-11)、中国文学の泰斗吉川幸次郎と法華経の英訳者バートン・D・ワトソン教授(3:216-217)、若き日のトルストイ(4:137)、マリー・キュリー(4:203-204)、ライナス・ポーリング(3:93-94, 4:204, 10:18-19)、吉田松陰(5:105-106)、ケルヴィン(5:169-170)、カンボジアのシアヌーク国王(10:124-125)、ルソー(12:40)、ブライアン・R・ウィルソン(15:57-59)、A・J・トインビー(19:61)等々。
 - 6) 次のような用例がある。「教育という聖業」(5:185)。「教育という最も尊き聖業」(11:22)。「教育は聖業である」(16:166)。「教育は地味ではあるが、人間をつくり、育てる聖業である。これほど尊い仕事はない。これほど価値ある、喜びの深い仕事はない」(17:7-8)。

- 「教育の大業」(17:8)。「教育ほど価値があり、未来を開く重大な意義をもつ聖業はない」(17:50)。「意義深き教育の「大聖業」」(17:96)。「教育ほど尊い聖業はない」(18:146)。「教育は、人間の究極の聖業である」(19:90)。「教育という聖業」(20:29)。鄧穎超が「教育は人間をつくる聖業です」と述べた言葉としても紹介されている(18:151-152)。ちなみにヘニングセン・池田(2009)のタイトルには「教育の聖業」が入っている。
- 7) 次も参照。「牧口初代会長は、「教育こそ、人生最高至難の技術であり、芸術であり、科学である」と強調しておりました。……教育は、何ものにも替えられない「生命」という無上の宝珠を対象としている」(7:21)。なお「無上宝珠」＝「無上宝聚」は「御義口伝」等(日蓮1952:725,784)、「妙法蓮華経信解品第四」(創価学会教学部編2002:264)を参照。
 - 8) たとえば以下を参照。「自分の子ども以上に、青年を大事にし、学生に尽くしていく」＝「人間教育の真髓」(10:93)。「わが子のごとく心から愛していただきたい」(11:39)。「わが子」以上に、「学生」に愛情を！」(16:123)。「教員は、生涯にわたって、学生を大切にすることである。わが子以上に学生を愛していくことである」(16:138)。「教員が、親以上の愛情をもって、学生や生徒たちを包んでいけるかどうかである」(16:141)。「わが子のごとく大切に、守り育てていく」(19:5)。「わが子以上に大事にせよ」(19:141)。「親子以上の結びつきが教育の世界」(21:7)。「……学生を「わが子以上に」大切に、面倒を見てもらいたい」(22:9)。「根本は愛情」(22:10)等。
 - 9) 池田(2014a)のほか、池田大作(2004)、池田2014b、『全集』101、創価大学公式サイト「創価大学の理念」・「教育提言」等にもある。積尊に影響を受けた宗教学者ロバート・サーマンから着想を得たものであり、さらに人格は手段ではなくそれ自身が目的であるとのカントの人格哲学とも似た香気があると明かされている(池田2014a:274-275)。
 - 10) たとえば人間に関して「人間主義の哲学」(6:167)、「人間主義の政治」(9:92)、「人間が原点です。読書が人間をつくる」(11:86)、「人間のため」「人間の成長」(22:118)、「人間以上の尊厳なる者はいない、生命以上の宝はないとの不滅の原点」(記1:148)等。師弟に関して、「人生の師」＝「戸田先生」＝「人生の原点」(2:119)、「私の行動の一切の起点」＝「師への報恩」「師の構想の実現」(19:163)等。そして大学に関して、「大学の原点」＝「建学の精神」(13:7)、「建学の精神」「創立の精神」(16:58)、「大学の使命」(16:74)、私立大学の「魂」＝「建学の精神」「創立の原点」(20:135,143)、創価大学の原点＝軍国主義と戦った「牧口先生の獄死」(7:91,19:19)、「創価教育の原点」(15:141,20:137)、「創価教育の原点は師弟」(20:130)等。ほかに次のような原点もある。トインビー対談は「私にとっての、世界の知性との対話の原点」(18:188)である。ユネスコの「生涯教育」の4つの理念は「学びの原点」である(23:210)。「民族」をある種の「1つの原点」とすることに否定的な見方もある(記2:21)。
 - 11) 『論語』巻第2里仁第4・15、巻第8衛霊公第15(孔子1999:77,304)参照。
 - 12) 訳者の山下肇氏に関して、6:27-37参照。
 - 13) 『創立者の語らい』はユーモアに溢れてもいる。この講演もそうである。この「一大事」の導入部がとても面白く、次にあげておこう。「仏法には「一大事」という哲理が説かれている。この言葉は、本来仏法用語でありながら、広く一般世間でも使われております。たとえば諸君が入学試験に受かるか落ちるかは一大事である。また大久保彦左衛門の口グセであった「天下の一大事！」。確かにそれらも一大事には違いありませんが、それが本来の仏法用語であるとされますと、またそれこそ私には一大事なのであります」(1:175)。まさに爆笑のユーモラスな名講演である。『創立者の語らい』のそのあたかなユーモアの分析もありうるだろう。
 - 14) たとえば次も参照。「偉大な人生には、必ず偉大な原点がある。原点を忘れない。だから強いのです」(19:51)。これは、原点を忘れない実際の行動が原点を偉大にしている

ということにもなるだろう。天台の「従藍而青」(3:166, 日蓮1952:1505)につながるものかもしれない。「[「原点」をもつ人はまことに強い」(4:146)。「原点を忘れた人生は、迷い、さすらう旅のようなもの」(8:39)。「原点を忘れ、原点を軽んじる人間は、増上慢の人間であり、最後は大敗北の人生となってしまう。／常に原点に一その人が強い」(8:40)。「見栄や虚栄に走るのは、「人生の原点」を見失った姿」(11:41)。「悩みに直面したときに、立ち返ることのできる原点をもった人生は、行き詰らない。」(19:198)

- 15) たとえば池田新介(2012, 2014)を参照。「自滅する選択」というタイトルが秀逸である。
- 16) 次も参照。「原点」=母校(8:39)、「永遠の前進と勝利の原点の天地」(19:198)。
- 17) おそらく『ホンブルク』(1798-1800)所収の「わがもの」の一節と思われる。次のようにある。「自分の土地に根を持たない草木のように／人間の魂はもえきれようとする／憐れなその人はただ日の光をたよって／聖なる大地をさまよって行く……／ねがうは私のはかない心をかまくまうために／定まった場所が私にあたえられ／心が故郷を失って／あらぬ方へあこがれて行くことのないように」(Hölderlin 1972:304小牧・吹田訳113-114)
- 18) おそらく『ヘルダーリンの詩作の解明』(Heidegger 1981)を指すと思われる。
- 19) 次も参照。「故郷を愛する人は、そのまま、人間を愛し、世界を愛する人に通じる。」(5:35)
- 20) 『古文新宝』「朱文公勸学文」(星川1956:4)参照。6:174も参照。
- 21) 次も参照。「どのように過ごしても一日は一日。一生は一生である」(3:193-194)、「今の自分自身」に生きること」(5:37)
- 22) この「午前八時の太陽」は、次の詩「青年の譜」の冒頭にある。「天空に雲ありて／風吹けど／太陽は 今日も昇る／午前八時の青年の太陽は／無限の迫力を秘めて／滲透しつつ 正確に進む／己の厳しき軌道を はずさずに／天座のかなた 蒼穹狭しと／王者赫々と／太陽は ただ黙然と進む」(全集39:15)。この「午前八時の太陽」については次のように明かされている。「まさしく青年は、昇りゆく旭日であります。時代の混迷の闇が深ければ深いほど、青年の向学の英知が光ります。不屈の情熱が光ります。快活なる連帯が光るのであります。私は若き日から「午前八時の太陽」という言葉が大好きです。「午前八時の太陽の如く」を合言葉に友と励まし合いながら、ありとあらゆる苦難を乗り越え、勝ち越えてきました」(創価大学公式サイト「ニュース」・「2014」・「2014年05月16日 中国 天津外国語大学から創立者へ名誉教授称号」)。天津外国語大学の校章に、「青き地球を背景に、壮麗な鐘楼とともに、「午前8時」を告げる時計」が描かれている点から言及されたものと思われる。上記引用の謝辞では「青年の譜」の冒頭が贈られている。
- 23) 『大学』「苟日新、日日新、又日新」「苟みて日に新たに、日に新たに、又日に新たななり」(赤塚1967:61)参照。
- 24) 「当体義抄」(日蓮1952:515)他。
- 25) このスピーチの1996年はアトランタ五輪の年、近代五輪百周年であり、それにちなんだものとなっている。
- 26) ニーチェの『悦ばしき知識』に「そこに泉あり、足元を掘れ」(Nietzsche 1965:3訳22)とある。
- 27) たとえば次を参照。「誰人にも使命がある。現実の大地に足を踏みしめた人には、その使命が明確にわかってくるものだ」(1:18)。「自分のおかれた場所で、信念に徹して生きた人」(3:135)。「だれがなんと言おうと、自身のいるその場所で、心を定めて戦い続ける人が、真の勝利者である」(5:13)。「進路はさまざまであるが、一人残らず、自分の道で輝いていただきたい」(5:46)。「黄金の価値創造の人生を、あの地、この地で、飾って

- いただきたい」(6:62)。「自分が今いる場所で、自分らしく、精いっぱい、はつらつと輝いていていただきたい」(6:187)。「今世のそれぞれの立場の大闘争」(8:10)。
- 28) エンクルマ・ガーナ初代大統領の獄中という極限状況下の気概を紹介しつつ「場所ではない。条件ではない。格好ではない。心一つで、大いなる戦いはできる」(4:172)と述べている。「ガンジーは南アという「今いる場所」で戦った」(6:9-10)。「今いる場所が戦場なのである。そこで勝つ人が勝利者なのである」(6:10)。ヘレン・ケラーを通して、「勇気の人には、どんな場所でも、「人間修行の道場」となる」(10:8)。インドネシアの詩人レンドラの戦い「偉大な人間、強い人間、正しい人間は、たとえどんな場所であっても獅子吼するものです」(21:75-76)。温家宝元総理の「困難な地方赴任」体験、「どんな仕事もやり遂げよう」(21:110)。
- 29) 尾崎(1983:34-36)参照。
- 30) 『残照』「大学問答」(阿部1961:44)参照。
- 31) 『秋窓記』「丘の上から」(阿部1960:301)参照。
- 32) ほかに職場に「いなくてはならない人」(14:66)ともある。
- 33) 「照于一隅」。「径寸十枚非是国宝、照千一隅此則国宝」(最澄1991:194)に由来する。「照千一隅」と「照于一隅」は論争的一節だが今回は立ち入らない。いずれであっても使命論・人材論であることには変わらない。
- 34) 小島画伯は、1932年から1971年までの約40年間、八王子市丹木町に在住。滝山城址の下から創価大学の栄光門にかけての「善太郎坂」の由来から、小島善太郎画伯の生涯が紹介されている。6:14-21参照。「父は生涯にわたって、冒険を続けた絵を描いてきた」(2016年3月21日、画伯の次女・小島敦子氏談)。まさに「修行の坂」(6:20)を登り続けた創造の一生だった。しかもこれはいかにも私見であるが、最晩年の91歳の作品「桜青春の里」(日野市立小島善太郎記念館・百草画荘所蔵)は瑞々しく躍動感にあふれて、かつ明鏡止水の趣がある。未完の遺作「男山」もある。偉人にはこれで終わりということがない(特48-49、尾熊・坂本2006:234-246)。
- 35) 創価大学中央図書館蔵書に画伯の婦人・小島恒子氏寄贈の1978年版がある。
- 36) 次も参照。「仕事を「自分を大きく育てる修業であり権利」と捉える決心も大切であろう」(5:135-136)。
- 37) 創立者の思想の根幹をなす師弟論・生命論に関しては最優先課題としてすでに取り組んだ(坂本2016b参照)。

参考文献

池田大作(1995-2015)『創立者の語らい』27巻(既刊分)、創価大学学生自治会編、創価大学学生自治会。

*

池田大作(1988-2015)『池田大作全集』全150巻、「池田大作全集」刊行委員会編、聖教新聞社。

*

アブエバ・V・ホセ、池田大作(2015)『マリンロードの曙—共生の世紀をみつめて』聖教新聞社。

ヘニングセン・ハンス、池田大作(2009)『明日をつくる“教育の聖業”—デンマークと日本の友情の語らい』潮出版社。

池田大作(1998)『「第三の人生を語る—高齢社会を考える—」』聖教新聞社。

池田大作(2005a)『創価教育の源流』創価大学創友会編、創価大学創友会。

池田大作 (2005b) 『学は光－創立者の指導集』創価大学通信教育部・開設30周年記念編纂委員会編、創価大学通信教育部。

池田大作 (2014a) 『創立の精神を学ぶ』改訂版、創価大学創価教育研究所編、学校法人創価大学。

池田大作 (2014b) 『創立の精神を学ぶ』創価大学通信教育部編、学校法人創価大学。

サドーヴニチ・ヴィクトル・A、池田大作 (2004) 『学は光－文明と教育の未来を語る』潮出版社。

*

阿部次郎 (1960) 『阿部次郎全集 第十巻』角川書店。

阿部次郎 (1961) 『阿部次郎全集 第十一巻』角川書店。

赤塚忠 (1967) 『新釈漢文大系2 大学 中庸』明治書院。

Chekhov, Anton Pavlovich (1991) *The Steppe and Other Stories*. translated by Constance Garnett. London: Everyman's Library. 神西清・池田健太郎・原卓也訳 『チェーホフ全集7小説(1887-88)』中央公論社、1969年。

ディオゲネス・ラエルティオス (1984-1994) 『ギリシア哲学者列伝』(全3冊)、加来彰俊訳、岩波文庫。

Eckermann, Johann Peter (1999) *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens 1823-1832*. Herausgegeben von Christoph Michel unter Mitwirkung von Hans Grütters. Frankfurt an Main: Deutscher Klassiker Verlag. 『ゲーテとの対話』(上・中・下)、山下肇訳、1968-1969年。

Emerson, Ralph Waldo (1982) *Ralph Waldo Emerson, Selected Essays*. New York: Penguin Books. 入江勇起男訳 『エマソン名著選 精神について』日本教文社、1996年。

Heidegger, Martin (1981) *Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung*. Gesamtausgabe.I.Abteilung. Veröffentlichte Schriften 1910-1976. Frankfurt an Main: Vittorio Klostermann. 濱田恂子・イリス・ブッフハイム訳 『ヘルダーリンの詩作の解明・ハイデッガー全集 第4巻』創文社、1997年。

Hermanns, William (1983) *Einstein and the Poet: In Search of the Cosmic Man*. Boston: Brandon Books. 『アインシュタイン、神を語る・宇宙・科学・宗教・平和』雑賀紀彦訳、工作舎、2000年。

Hölderlin, Johann Christian Friedrich(1972) *Hölderlin, Sämtliche Werke*. Erster Band. Gedichte bis 1800. Herausgegeben von Friedrich Beissner. Stuttgart: Verlag W. Kohlhammer. 手塚富雄責任編集 『ヘルダーリン全集・詩1 1784-1800』河出書房新社、1966年。小牧健夫・吹田順助訳 『ヘルダーリン詩集』角川文庫、1959年。

星川清隆 (1956) 『古文真宝選新解』明治書院。

池田新介 (2012) 『自滅する選択—先延ばしで後悔しないための新しい経済学』東洋経済新報社。

池田新介 (2014) 「意志力の行動経済学」『経済セミナー』2014:8・9:42-46、日本評論社。

犬丸徹三 (1980) 「私の履歴書・犬丸徹三」日本経済新聞社編 『私の履歴書 経済人4』所収、387-440、日本経済新聞社。

小島善太郎 (1971) 『若き日の自画像』雪華社。

孔子 (1999) 『論語』改訂新版、金谷治訳注、岩波文庫。

牧口常三郎 (1983) 『牧口常三郎全集第6巻 創価教育学体系 (下)』第三文明社。

夏目漱石 (1978) 『私の個人主義』講談社学術文庫。

- 日蓮 (1952) 『新編日蓮大聖人御書全集』 堀日亨編、創価学会。
- Nietzsche, Friedrich (1965) *Die Fröhliche Wissenschaft* (《La Gaya Scienza》). Stuttgart: Alfred Kröner Verlag. 『悦ばしき知識』 信太正三訳、ちくま学芸文庫、1993年。
- 尾熊治郎・坂本幹雄 (2006) 「高齢思想のフロンティア」 尹龍澤・佐瀬一男・坂本幹雄編 『高齢学へのプレリュード』 所収、233-264、北樹出版。
- 尾崎和郎 (1983) 『ゾラ』 清水書院。
- プラトン (1979) 『国家』 (全2冊)、藤沢令夫訳、岩波文庫。
- 最澄 (1991) 『原典日本の思想2・最澄・顕戒論・山家学生式 [他五篇]』 安藤俊雄・園田香融校注、岩波書店。
- 坂本幹雄 (2011) 「アダム・スミスの教育経済学」 『通信教育部論集』 (創価大学通信教育部学会) 14:27-46。
- 坂本幹雄 (2016a) 「尾熊治郎教授のご退職に寄せて・果てしなき探究の対話—尾熊治郎、その人と思想」 『通信教育部論集』 (創価大学通信教育部学会) 18:6-15。
- 坂本幹雄 (2016b) 「ブロンズ像の指針—『創立者の語らい』の箴言的解読—」 『池田思想研究の新潮流』 (創価大学通信教育部学会編) 所収、第三文明社。
- Sandel, Michael J (2012) *What Money Can't Buy: The Moral Limits of Markets*. New York: Farrar, Straus & Giroux. 鬼澤忍訳 『それをお金で買いますか—市場主義の限界』 早川書房2012年。
- Sandel, Michael J (2013) Markets Reasoning as Moral Markets Reasoning as Moral Reasoning: Why Economists Should Re-engage with Political Philosophy. *The Journal of economic perspectives*. 27(4):121-140.
- Simmel, Georg (1967) *Fragmente und Aufsätze*. Hildesheim: Georg Olms. 土肥美夫・堀田輝明訳 『ジメメル著作集11 断層』 白水社、1976年。
- 創価学会教学部編 (2002) 『妙法蓮華経並開結』 聖教新聞社。
- Tolstoy, Leo (2012) *Anna Karenina*. translated by Constance Garnett. New York: Barnes & Noble. 中村融訳 『アンナ・カレニナ』 (全3冊)、岩波文庫、1989年。

Web Site

2016年3月16日アクセス

創価大学 <http://www.soka.ac.jp>

TBS テレビ <http://www.tbs.co.jp>>kuro-no-onna

- * 小島善太郎画伯の次女・小島敦子氏より、画伯の性格やエピソードについて数多くの貴重なお話を伺った。末尾ながら記して深く感謝の意を表します。